

## 自称のパフォーマティビティ

### — 一人称の使用におけるジェンダーを巡って—

川上 亜伊里

#### 序章

文化とは人が生まれた時点から身につけてきた生活様式の総体であり、認知的枠組みの総体である。それは人の意識の中でもっとも気付かれにくいものであり、異文化との接触や自文化についての意識的な探索を通して初めて自覚的なものになると考えられる。だが、そうは言っても例外はあり、すべての事柄が自覚的なものになるとは限らない。たとえば、日本特有の概念である「甘え」がそれである。土居によって、日本人特有の対人行動や対人意識、対人感情などを理解するための鍵概念として提唱されて以来、多くの研究者の関心を集め、さまざまな議論が展開されてきた。

土居（1971）は「甘えの心理は、人間存在に本来つきももの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることである」とした。そこで土居は、「甘え」の最も簡単な定義として「人間関係において相手の好意をあてにして振る舞うことである」と再定義している。彼は「甘え」という言葉は日本語固有の語彙であり、この言葉によって表現される日本人の人間関係は、子どもの母子関係だけでなく大人同士の人間関係にも広く当てはまると主張した。相互依存的な人間関係を許容する日本では、欧米に比べて特に「甘え」が発達しやすいと考えられている。

しかし、土居が定義した「甘え」理論は曖昧さ故に議論の的となった。そんな中、なかなか進まない実証的研究にメスを入れたのが、藤原・黒川（1981）である。大学生を対象に「甘え」がどのような状況の下で最も表出されるのかを調査した。また竹友（1988）は、「甘え」がコミュニケーションの仕方と関わる心理的傾向があると主張した。これらの先行研究を参考にしつつ、本稿では、発話行為の中で自称の選択により、異なる甘えの表出形態が見られることに注目し、日常間における自称の使われ方と「甘え」がいかに関連するのかを考察する。

発話では、「誰が〇〇した」などと、主語にあたる部分が存在する。人称詞は主語になりえるものであり、日本語には人称詞が多いのが特徴である。一人称自称詞を例にとっても英語だと「I（アイ）」一つで済むが日本語にはいろんな呼び方があるって複雑である。

自称詞とは、話し手が自分自身に言及する言葉のすべてを総括する概念である。よって一人称代名詞は自称詞のごく一部にすぎない。

一人称自称詞は、私（わたし・わたくし）・僕（ぼく）・俺（おれ）・あたし・あたくし・うち・おら・おいら…と、挙げればかなりの数がある。若い女子に多く見られる現象として、自分のことを「わたし」と言わず、名前で言う。「花子はジュースが飲みたいの」といった具合である。女性がこのように会話中「名前」を使用することはよくあるが、会話中に男性が「名前」を使用することはあまり聞いたことがない。よって、女性と男性では自称詞の使用方法に違いがあると予測できる。いつ、どんな時に自称詞を使い分けるのか、性差によってどう変わるのだろうか。

自称詞は自己を表現する最も身近なツールであり、自称詞として何を選ぶかによって「大人」としての自覚があるのかを検証することが可能となる。現代はニートやフリーターの増加で、甘えている若者が多いという状況があり、私たち大学生はモラトリアムの時期にあり、「大人になりたくない」という心理が働いている。先行研究では、女兒のほとんどが自分のことを「名前」で表現するとあり、れいのるず＝秋葉かつえ（1997）によると、「たいていの女性は大学卒業までには『わたし』に回帰する」とある。しかし、卒業学年の女子大生がいまだに自分のことを「名前」で表現するあたりに、モラトリアムから来る「大人になりたくない」心理と同時に、「甘え」から来る心理が関係しているだろうと考える。

以上の問題を明らかにするために、まず1章ではモラトリアムと、「甘え」の定義、「甘え」の問題点について述べる。2章では、「わたし」という一人称代名詞を哲学的観点から考察する。3章・4章では、幼児の自称詞の使い方と大学4年生の自称詞の使い方と比較して検討する。以上を踏まえ、最後に自称詞が状況によってどのように変化し、一人称の使用におけるジェンダー間の違いについて述べていく。

## 1章 青年期の甘えとアイデンティティの確立

### (a) モラトリアム

現代の日本において、都市化により核家族化が増加し、より多くの女性が社会で活躍するようになったが、それと共に子どもの数が減少しつつある。こういった環境で育つ子ど

もの多くは、ゲームやネットなどの一人で遊ぶ機会が多くなり、他者を理解・尊重することにより対人関係をうまく作ることができなくなっていると言われている。最近の親子関係では、子どもは親に甘え続け、親は子どもが心配で干渉しすぎて子離れできない。現代社会の子ども達は親から自立するということが困難な時代に生きていると言えるのではないだろうか。

たとえば、2005年の『労働経済白書』（厚生労働省）によると、決まった職に就かずアルバイトやパートで働くか、または働きたいというフリーターと呼ばれる15～34歳の青年の数は、2004年の時点で213万人と推定され、101万人とされた1992年から12年間で2倍以上に増加している。一方、ニートと呼ばれる若者も急激に増えている。もとはイギリスで生まれた言葉で、「働くことも学校に行くことも、職業訓練もしていない（Not in Employment, Education or Training）」16～18歳の若者の略称（NEET）である。労働経済白書によると、わが国でも働くことも仕事を探すこともしていない15～34歳の青年のうち、学校や大学の卒業者で未婚かつ家事も通学もしていない人として集約すると、すでに2004年で64万人の存在が認められるという。

わが国でニートが知られる前に生まれた言葉として「ひきこもり」がある。現象としては「就学または就労といった自宅意外での生活の場が長期にわたって失われている状態」とされる。かつては小中学生の「不登校」として問題になったが、最近になって、20代や30代の青年でも事態に引きこもるケースが目立つようになり、この言葉が生まれた。こうした、「定職を持たない若者」の増加については、一般的に若者自身の甘えが問題であるとする見方が強い。確かに「働きたい時に働けばいい」とか「働きたいけど働かない」といった言い訳は、甘えに他ならない。このように定職を持たない若者が増加する背景を見ると、若者の意識の変化は、単に就労の問題だけでなく、その他の生活全般に現れている。たとえば、言葉やファッションにおける幼児化現象、成人式での暴動などに見られる社会的常識の欠如、自分の意に添わないと簡単にキレるといった忍耐力の欠乏、あるいはわが子を放置したり、虐待するといった親としての自覚のなさなどである。そこには、大人になりたくないというモラトリアムの姿が浮かび上がってくる。

私たち大学生は、発達心理学的には青年期後期にあたる。この時期は、依存と独立のバランスがとれるようになる自立の時期とされているように、これまでの青年期の課題を解決して、社会に出る準備を行う時期である。「青年」と「若者」の言葉の違いであるが、どちらも若い人という意味では違いはない。しかし「青年」は、明治時代の中頃に、少年

と老年の間に位置する年代として作り出された言葉である。そのため、人生の一時期を示す意味合いが強く、心理学や社会学の養護としても定着している。その意味では、大人になりきれない若者を議論する場合、概念的には「青年」の方が適している。つまり「青年」は心理学や社会学では「子どもから大人への移行期にある者」とされる。

Erikson（1959）は、青年が成人期に入ることを一定期間猶予し、その間に自我同一性の確立に向けてさまざまな努力や模索を行うことの必要性を指摘するとともに、その期間を「心理社会的モラトリアム期」と命名した。さらに、自我同一性の確立を基礎とした時間的展望の獲得が必要であるとした。時間的展望とは、「ある一定の時点についての見解の総体」である。この心理社会的モラトリアムは、脱工業化社会における職業の高度化と分業化に伴う教育期間の延長によって、先進産業社会の青年後期の一般的傾向となっている。小此木（1986）は、このような日本の青年の状況を Erikson が指摘するような心理社会的モラトリアムとは異なることを示唆し、新しいモラトリアム心理を記述した。小此木の言うモラトリアムとは支払猶予期間のことで、肉体的・知的には一人前になっているにもかかわらず、社会に対する義務・責任にも支払いを猶予されている状態を指す。山添（1983）によると、モラトリアムの時期とは「自分がこれまで生きてきた過程を振り返り、発達課題を果たしてきたかななどの自己形成史を確認したり、現代の多様な価値観の中から正しいと思われるものを選択したり、未来を正しく展望する目を養ったりしながら自己の内面を豊かにし、真に自立した心を醸成する時期である」とした。さらに山添は、こうした捉え方ができて初めてモラトリアムは大学生が自立した人間になるための自己形成を助ける働きをすると指摘している。

つまりこの時期は、「自分さがし」の時期ということになる。自分はどんな人間なのか。どんな性格なのか。何をやりたいのか。どんな職業につきたいのか、そのためにはどんな学校に進学するのか。そして、自分は一体誰なのか。

進学や就職で悩まない人は、ほとんどいない。また、青年期の人たちは、性格テストなどを好む人が多いようである。自分が誰なのかを知ることで、自我同一性（アイデンティティ）を確立しようとするからであろう。自分が他の誰でもない、オンリーワンの自分であり、現在の自分が何者であるか、将来何でありたいかを自覚すること、つまり自分を発見することがアイデンティティの確立である。

（b） 甘え

以上に加え、日本人のモラトリアムは、自己や他者に対する日本人独特の「甘え」からきているとする指摘がある。「甘え」は英語には的確な訳語を見出すことのできない日本語特有の言葉であり、これまで多くの研究者たちの関心を集めてきている。土居によると、「甘え」は日本人特有で、日本人の心理と日本社会の構造をわかるための重要なキーワードであると述べた。日本人の対人関係やパーソナリティ、精神病理を理解する上での鍵概念としてさまざまな視点から論じられてきた。「甘え」とは「人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする事」つまり「乳児の精神がある程度発達して母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に、その母親を求める事」であるとした。簡単に言えば、「甘え」は周りの人に好かれて依存できるようにしたいという、日本人特有の感情だと定義することができる。同じようなことがフロイドのいう「同一化」についても言えよう。しかし、この土居の定義に対して異議や批判を唱える者も多い。たとえば祖父江（1972）は、「甘えとは、最初から相手が自分を受け入れてくれるであろうことを期待しながら depend すること」であると定義している。木村（1972）は広辞苑および大言海の義解を引用して「一体化を求める依存欲求を表す言葉ではなくて、いわばすでに相手に受け入れられ、一体化が成立している状態において、もしくはそのような許容が成立しているという自分本位の前提の上に立って勝手気ままな振る舞いをする事」と述べている。また小此木は「甘えをある種の安心しきった、お互いを愛し合っていることをどこかで確認しあっている」という相互性と考えている。これらに対して土居による反論が繰り返されている。土居は、「甘え」を再定義し、「対人関係において、相手の好意をあてにして振る舞う事」とした。このように「甘え」に関する定義や解釈は研究者によってさまざまである。

土居は「甘え」を日本語固有の語彙であるとした上で、母子関係だけでなく大人同士の対人関係においても広く当てはまるものとみなした。そして「甘え」が対象関係を成立させる欲求、すなわち依存欲求や一体化欲求であるとした。その後、土居は「甘え」が相手への願望を示す欲求的感情であると言い換えた。たとえば、「彼は甘えている」という場合、まず「甘え」は観察された行動（たとえば、なれなれしい態度や気を引くような口調など）を指しているが、「甘え」はこのように観察された行動自体ではなく、その行動の奥にある感情を意味しているとされる。またこの接近を求める内的な欲求や願望は、土居自身や他の心理学者によってより具体的に述べられている。まず、土居の考える依存欲求に近いものでは、自己中心的な欲求を受け入れてほしいという願望（小此木、1992）や、

周りの環境や相手をコントロールしたいという願望（山口， 1999）がある。また一体化欲求に近いものでは、愛されたいという願望、自分を受け入れてほしいという欲求がある。

### （c） 甘えの問題

このような「甘え」理論の問題点は、初めに提唱した土居が「甘え」は、誰もが体験したことがあるので関知の事実としてそれ以上言明しなかったことにある。「甘えは自明の概念」と主張しているが、果たしてそうであろうか。

この疑問を踏まえ、加藤・高松（2001）は一般人に「甘え」の特徴を自由記述してもらい、その具体的な回答をカテゴリー化することで「甘え」の素朴概念とはどのようなものであるかを明確にした。これは一般人に調査することで理論に捉われがちな心理学者が見落とすかもしれない現象を違う側面から考察できるからである。「あなたは、『甘え』とはどうゆうもの、どういうことをすることであると思いますか」という質問を 99 名が回答した。その結果、「甘え」の素朴概念では心理学者の概念規定と類似した特徴が多く見られたが、心理学者の概念規定では見られなかった「自分に甘いこと」や「自分の言動や自分の立場に無責任であること」などが含まれていた。また心理学者の概念規定には「相手との親密さを保つために、または相手を喜ばせたり満足感を与えるために愛情や信頼を示すこと」や「相手の愛情を確認すること」があったがアンケートでは見られなかった。このことにより、土居が言う「甘えは自明の概念」ということには少なくともならないことがわかる。

土居の提示した概念が曖昧だった故に、実証的研究はなかなか進まなかった。しかし、甘えを理解することは日本人の対人関係や行動様式の特徴を理解する上で極めて重要であり、「甘え」を自覚することに重要な意味があるとみなされるなど「甘え」の実証的研究はカウンセリングや心理臨床の実験にも有益な示唆を与えうるものと考えられている。

また、「甘え」をある種のコミュニケーションの仕方と捉えるものもある。竹友（1988）は、土居の「甘え」が個人内の感情経験に限定されているが、辞書の定義や日常の使用法に基づくなら「甘え」がある種のコミュニケーションの仕方と関わる心理的傾向があると主張した。そして竹友は、「甘えとは、相手との同意のもとに、年齢や置かれている状況を考えると当然自分ですべきことをしなかったり、すべきでないことをすることである」とした。

小此木、荻野（1968）によれば、土居の甘え理論では精神分析概念としての甘えと、

日常語としての甘えが区別されていないまま混在して使われている点も批判として指摘されている。また土居の言う「甘えは日本人心理の特異性」として「本来人間一般に共通な心理現象を表しているという事実は、日本人にとってこの心理が非常に身近なものであることを示すとともに日本の社会構造もまた、このような心理を許容するように出来上がっていることを示している」としている。

たとえば、中根（1967）によると、「日本の社会構造の特徴をタテ関係の重視として規定」していたが、土居に言わせると「それもまた甘えの重視として規定することもできる」とし、日本人の意識を決定している種々の言葉の吟味を通して、日本の社会がいかにかんえによって浸透されているかを示唆している。

「甘え」についての実証的研究は、藤原・黒川（1981）の「対人関係における甘えについての実証的研究」が初めてであろう。この研究では、土居によって精神分析的見地から提唱された「甘え」の数量化を目指し、いかなる対象に対してどのような状況のもとで「甘え」が最も表出されるかを明らかにすることを目的として、大学生を対象とした調査を行っている。11の困った状況のもとで、12の対象人物に対する感情を10の甘え尺度で評定することが求められ、その結果「甘え」の表出は対象によって異なり、両親よりも恋人・親友の方が「甘え」が多く見られ、「甘え」の表出においては男性よりも女性の方が多くの「甘え」が見られた。また、困った状況の家庭問題に関する状況では両親や兄弟姉妹に対して「甘え」を最も示し、個人生活の問題に関するその他の状況では恋人や親友に対して「甘え」を強く表出するという結果を得ている。また外山・高木（1991）らは、青年期の男女（大学生、高校生、中学生）の意識的なレベルでの「甘え」の心理について、多面的な分析を試みることを目的とし、「甘え」の対象（父親、母親）と困った状況を設定した文章を提示し、自分がその主人公になったと仮定して、その時の①「甘え」に関する価値観、②「甘え」の欲求、③対象の受容に関する予測、④自分が甘えることへの抵抗感を調べるため、質問紙による調査を行っている。この研究では、男子は「甘え」を否定的に捉え、女子は肯定的に捉えていることが示唆され、「甘え」の欲求は女子の方が強く、年齢が上がるにつれ、性差が広がるという結果を得ている。また、「甘えを受け入れてくれるだろう」という対象に関する予測については、男子よりも女子の方が肯定的な予測を行っており、自分が甘えた際に相手がそれを受け入れてくれると考える傾向が強いという結果であった。甘えることへの抵抗感については、年齢に関係なく男性の方が強く、「甘え」に関する価値観は年齢に関係なく女子の方が肯定的であった。

これらの結果から、男子と女子とでは、甘えたいと意識した場合に実際に甘えるか否かの判断には違いがあることがわかる。女子はその判断の基準は他者基準であり、対象の受容に関する予測とはあまり関連がなく、しつけにより内面化された自己基準に影響されると考えられる。一方、社会からの制約によって「甘え」に関してより否定的な価値観を内在化したため、男子の「甘え」はより「建前」に支配され、限られた状況において限られた対象にしか甘えられないと思われる。このような先行研究から、甘え欲求は女性の方が強く表出し、対象により甘え欲求の表出に差があり、また甘えのメカニズムには性差があることが示唆されている。このことについて、外山（1993）は社会的にも女性の方が「甘え」を表出することが男性よりも許されている点を指摘している。この背景にはジェンダーの問題があるだろう。逆に男性は女性よりも自立や独立を促されやすく、頼るといふニュアンスを含む他者との関わり方は好ましくないとされやすい。つまり、依存というニュアンスを持つ「甘え」に対しても女性より否定的であり、抵抗感が強い。このようなことから、女性の方が総じて「甘え」意識が高いという結果になる。ただし、現代は女性の職場進出が飛躍的に伸びており晩婚化や独身志向が拡大し、男性と変わりなく働く時代である。単に女性だから、という理由で「甘え」意識が高いと言えるのだろうか。

では、なぜジェンダーにおける「甘え」の違いが起こるのだろうか。土居は「甘え」を日本人の一般的な心理学的傾向とするが、その観点からは上記述べたような男女差を説明することは困難である。2章以降では男女差を説明するために、心理モデルから言語モデルに移行し、呼称とアイデンティティの関連性について注目することとする。

## 2章 哲学的観点からの「自称詞」

「私」という言葉には、「公」との対比で、エゴイズムを象徴するイメージがある。しかし、「私」の指示対象が私的でも「私」という概念自体は優れて公共的である。「私」という代名詞のおかげで「自分にとって自分が私であるように、他者にとってその人は私なのだ」と、他者の立場に身を置いて、他者の感情を想像することが可能になる。だから「私」を正しく使うためには、自己意識があることに加えて、間主観的な想像力が必要となる。

たとえば、「ゆうくん」と呼ばれている幼児のことを考えてみる。ゆうくんはご飯を食

べる時「ゆうくん、ご飯食べるよ～」、お風呂に入る時「ゆうくん、お風呂入ろうね～」、寝る時「ゆうくん、もう寝なさい」こうした体験の中から、ゆうくんは「ゆうくん」という音がいつもこちらに向かって発せられる、ということに気付くようになる。

やがて、ゆうくんもまた鏡像を自分の姿として認知できるようになり言語を習得し始める。その時には「ゆうくん」という語が、いつもこちらに向かって発せられるだけでなく、自分を指す言葉であるということに気付くようになる。しかし、そう気付くためにはある一定の音列が、ある決まったものを指す、ということが理解できていなければならない。

人の名前・物事の名は、多くの人々によって繰り返し用いられ引き継がれていく。ある音列がある物事の名として用いられ、理解されるためにはいくつものことが前提されている。まず「世界には時を通じて存在し続けるものごとがある」ということ、つまり、事物の同一性が前提とされている。その上で「かくかくの事物には今後も、しかじかに接すべきである」という規範が前提とされている。ある物事に遭遇した時「これはかつて、xxで出会った、あの◎◎だ」と再認され、ひとたび「同じ、あの◎◎だ」と認識されたなら、その物に対して一定の態度を取ることが求められる。いま目の前にいるのが、先週ゆうくんがデパートで迷子になった際、迷子預かりセンターに連れて行ってくれた人と同一人物だ、とわかったなら、ゆうくんは「この前は迷子預かりセンターに連れて行ってきてくれてありがとう」と言うことが求められる。

このような認知的・実践的な関係が成り立っていないならば、そもそも物事の名という概念そのものがナンセンスである。大庭（2003）によると、名を口にすることは「存続する物事を再認・同定し、同定した物事への態度についてコミットメント（言質）を負う」という実践的な関わりに参入することなのである。したがって、幼児が「ゆうくん」という音列が自分の名だ、と理解できた時、幼児はすでにそうした名の使用という実践に参与している。その上で幼児は「シロ」が隣の家のおばさんが飼っている犬の名前であり、「ママ」が母親の名であるのと同じように「ゆうくん」が自分の名であることを理解する。

しかしこの段階ではゆうくんにとって、自分を指すために用いることができるのはまだ「ゆうくん」という固有名だけである。「ゆうくん」、正確には「山田祐太」という固有名はもともと他人が彼を指すための名である。それは「東京ディズニーランド」「安倍晋三」「第一次世界大戦」と同じように世界の中の唯一の個体（個物・個人・事件）を指す、固有名である。ところが通常私たちは自分を指して話す時には自分の固有名よりも「わた

し」という一人称の代名詞を用いる。「わたし」という語が自分を指す。これはあまりにも当たり前響くが、このことを理解するのは「ゆうくん」という固有名が自分を指している、ということを理解するよりもはるかに難しいことがわかる。実際、幼児は固有名を用いて自分について語れるようになった後も、当初は「ぼく」・「あたし」という一人称の代名詞を使えない。他人が自分に呼びかけてくる時の名を、オウム返しに用いることしかできないのである。名前が「美奈子」なのに他人から「みーたん」と呼ばれていれば自分の名を「みーたん」と呼ぶことしかできないことになる。つまり「わたし」という一人称の習得が難しいのは、誰もが「わたし」を用いるからである。

「ゆうくん」も「わたし」も同じく自分を指す。それらの指示対象は同一である。にもかかわらず、この二つの語には大きな違いがある。「ゆうくん」という固有名は誰が口にしようとも、つまり他人が用いようとして自分が用いようとしてこの自分を指す。ところが「わたし」という代名詞は自分が語った時には自分を指すが、他人の口から出た時には自分を指さない。「わたし」という語の指示作用は固有名の指示作用よりもはるかに複雑である。

人はみな「わたし」という語を用いて、その人自身について自ら語る。そして自分もまたそうした人の一人にすぎない。このことが理解できた時、人ははじめて「わたし」という一人称を使えるようになる。自分のことをたくさんいる人物の中の一人にすぎないものとして、いわば突き放して考えられるようになる。

大庭は、以下のように述べている。

「自分が - いる、ということは、自分を意識して - いる、ということである。そして自分を意識している、ということは言葉の働きによって人の中にある、という自覚と不可分であった。しかるに、人の中にある、という自覚は『わたし』という語を使えることによってはじめて表出される。『わたし』という語は『ゆうくん』という固有名と同じものを指示するにもかかわらず、その使用には固有名と比べはるかに複雑な認知プロセスが要求される所以である。人は、外界からの情報を処理しながら自分と自分以外のものを区別して反応している。しかし、それだけではまだ自分というものが成立しているとは言えない。自分というものが成立している、と言えるためには

- ・ 世界の事物が自分に現れているように、自分もまた他人に現れている事物の一つだ、と理解できる。
- ・ 自分がどう存在しているかを他人に理解しうる考えの形で、自ら考えられるようにな

る。

- ・ その考えを『わたし』という一人称の語を用いた文で表すことができるようになる。

という複雑な情報処理のシステムが実現されねばならない。このようにして自分を意識して-いるということが、自分が-いるということである。そして自分が-いる、という事態の生成の鍵を握っているのは他人によって意識されていることを意識する、という出来事に他ならない。『わたし』という指標語は『ゆうくん』のような固有名とは違って、特定の個人を指す語ではない。誰が用いるかに応じて『わたし』という語は異なった人物を指す。つまり、指示対象は不定である。しかし、『わたし』という語の意義までが不定なのではない。その意義は一定である」(大庭, 2003 ; 68 ~ 70)

では、より具体的に「わたし」という自己は子どもの成長段階のどこで形成されるのだろうか。この点について、子どもの使用する一人称の変遷について先行研究を通して考察していくこととする。

### 3章 幼児による自称詞の使い方

自分をどのように名乗るかということは、自我の発達と関連があることが Wallon (1983) によって指摘されている。特に日本語の場合は、「ぼく」「わたし」「おれ」「うち」など、さまざまな自称詞があり、それを使い分けることによって対話の場における話し手と相手の具体的な関係を明示することができる。

日本語における自称詞の特徴を、鈴木(1973)は次のようにまとめている。「日本人の自称詞と対称詞の規則性を基本的に支えているものは、目上(上位者)と目下(下位者)という対立概念であり、自称詞は対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという機能を強く持っている。つまり自称詞や対称詞は話し手が言語という一種の座標系の内部で自分自身の位置を明らかにする行為であり、特定の相手との権力関係、親疎の度合いなど、自己を言語的に規定するまではいわば座標未決定の開いた不安定な状態であることを示すものである。相手が誰であろうと、相手が不在であろうと、まず自己を話し手、つまり能動的言語使用者として規定するインド・ヨーロッパ語などの絶対的自己規定と比較するとこの日本人の日本語による自己規定は相対的で対象依存的な性格

を持っている」と鈴木は考察している。つまり、日本語においては相手とのコミュニケーションをするためにどのように自己表現をするかを判断し、その状況に応じて自己規定を行い、妥当な自称詞を選択することが必要なのである。

その自称詞の働きに着目して、子どもがどのように自称詞を使い分けているのかを考察する。西川（2003）によると、子供の使用する一人称の変化として子供は自我の充実とともに、自分のことを指す言葉として「〇〇（名前）ちゃん」もしくは「〇〇（名前）」と自分の名前を話し言葉の中に再三登場させるようになるとされる。それが幼児期後半になると、とりわけ男児において「ぼく」「おれ」といった一人称代名詞に変わっていく傾向が保育所で観察された。しかし、その一人称の使用は一様ではなく、話し相手や場面に応じて異なることが明らかになっている。男女児ともに2歳台で9割の子どもが自称詞を使うようになり、それは名前+敬称（例 太郎ちゃん）、愛称（例 たあぼう）、名前（例 太郎）など（以下3種あわせて「愛称・名前」と略す）、親から呼ばれる呼称をそのまま用いるものであった。その後、男児は「おれ」「ぼく」の使用が3歳で3割に達し、5歳では約半数にのぼった。

両親と友だちに対する自称詞の使い分けを見ると、幼児期には両親に「愛称・名前」、友だちに「おれ」を用いる傾向が見られた。男児において、「ぼく」「おれ」が話す相手によって使い分けられていることが示された。これは会話する場において自分と相手の距離・位置を示す手がかりとして一人称が機能しているものと考えられよう。他方女児においては、就学前の「わたし」という一人称が果たす役割は小さかった。しかし、3・4歳でも使用する子どももいることから就学前児にとって、「わたし」という言葉は知っているでも使わない言葉であると考えられる。これは「おれ」を使う状況にある親は「子どもがつっぱっている時」と表記しているように、「おれ」には自己主張を支える働きがあるのに対し、「わたし」は「学校に行ったら使う」とある6歳児が言ったように、幼児にとってはフォーマルな場面に用いる語感があるためと考えられる、としている。

一方女児は、就学後も「愛称・名前」を使用し続け、両親と友だちでの使い分けもあまり見られないことが示された。この自称詞の使用に見られる顕著な性差は「ぼく」「おれ」といった男性語一人称と、「わたし」という女性語一人称が非対称であることを示すものである。一人称について井手（1979）は、男児の使用する「おれ」には自分の男らしさを誇示する機能があるのに対し、女児には「おれ」に相当する人称代名詞はなく「わたし」はフォーマリティーを表現するものであると解説している。この指摘を子どもの生

活に当てはめて考えると、「おれ」を使用することは有効に自己主張するために機能するものであるために3歳という早い時期から頻繁に使用され、他方そうした機能を持たないために「わたし」は使用されないと考えられる。男児が状況に応じて「愛称・名前」を使用して両親に甘えてみたり、「おれ」を用いて自分の力を誇示する中で、女兒は単一の自称詞を用いているというのが家庭での生活なのである。

2歳児が「〇〇ちゃんの」「〇〇ちゃんが」など呼称として使われる言葉を自称詞として用いることは自我の発達の指標の一つとして注目されている。田中（1984）は、それを自分の持ち物と友だちの持ち物を区別し、自分の持ち物や席に執着することの基礎になるからであるとした。さらに3歳を過ぎると、男児の場合は「ぼく」「おれ」などの一人称も使用するようになる。この3歳頃の一人称の獲得について Wallon は体験している場面から自分を主体として区別して取り出し、自分の立場を主張することを可能にするものであると述べている。

一般に言語発達においては、女兒の発達が優れていることが知られ、たくみに言語を操る姿が見受けられる。そこで、言語機能の高い女兒が保育園においても単一の自称詞しか使用していないのかどうか、その場合女兒はどのようにして自己主張しているのか、また自称詞の使用について、女兒がどのような認識を持っているのかを西川が観察・アンケートおよびインタビューによって調査した結果が以下のものである。

保育者・保護者によるアンケートには、「きっちり話をしたいと思っている時やままとでちょっとお姉さんっぽい時に『わたし』を使い、楽しかった話やちょっと甘えながら話す時など自分のことを色々聞いてほしい時には『名前』や『愛称』を使う」と記載されていたとある。また、保育者には「わたし」を使っていることが示されたが、家庭では「わたし」は用いていないことも判明している。これは、保育園ではごく自然に「わたし」を用いているように見える女兒が、親密な関係を持つ家庭では「わたし」ではなく、「愛称」や「名前」を用いて自分を表現していることを示すものである。「きっちり話したい時」に「わたし」を用いるという記載は「わたし」の持つフォーマリティーの高さを女兒が利用していることを示唆している。自称詞の使う場を限定しようとしていることも、自称詞を使い分ける力があることを示している。

日本において自分を名乗る方法は鈴木（1973）が指摘するように、相対的で対象依存的な性格を持っている。自分をどう名乗るかによって、相手との距離や位置を自分がどう考えているかを宣言することになるわけである。「保育園では自分のことを『名前』で呼

ぶけど、小学校に行ったら『わたし』を使う」という発言を受けて、学校というフォーマルな場で自分がどんな自分をたてようとしているのかが、自称詞の使用によっても推測できる。男児と比較して、バリエーションの少ない女性語自称詞環境の中で、女兒が自分なりにその使用を工夫し、場の持つ気分を表現していることが西川の調査で明らかになった。

次に、2～5歳の男児を対象に西川が調査した自称詞の使い分けに関する結果は、両親に対して2歳台で「名前・愛称」に加え「ぼく」「おれ」を使い始め、5歳の7割、6歳の8割が「ぼく」もしくは「おれ」を用いることが示された。その「ぼく」と「おれ」の使い分けに関しては、両親に対して「ぼく」を用いる傾向、友だちに対しては「おれ」を用いる傾向が判明した。さらにその実態を明らかにするために行った保育園5歳児クラスにおける観察調査および保育者・保護者アンケートによって、友だちに対して「ぼく」や「名前・愛称」を使っていることが示された。たしかに私の弟が幼稚園に通っていた頃、家庭では「ゆうちゃん」と自分のことを称していたが、私が幼稚園に彼を迎えに行った時、友だちに向かって「おれの姉ちゃんだぞ」と、「おれ」を使っていたことを思い出した。このことにより、西川の調査は信憑性が高い。

このような自称詞に見られる性差について、女性語・男性語の研究者である井手（1979）は、男児にとって「おれ」と「おまえ」はともに自分を誇示したい時や、男同士の仲間意識を表現したい時に使うものであり、男児は「おれ」を使うことによって自分の男らしさを誇示し、「おれは男だ。おれは強いんだ」と言おうとしていると述べている。また女兒については「おれ」に相当する機能を持つ人称代名詞はなく、女兒の使う「わたし」はフォーマリティーを表現するものであり、4歳の女の子が「わたし」を使う時、彼女は自分が幼くてもきちんとしたレディーであることを証明し、「こういう改まった時に何と言えればいいのか、ちゃんとわかっているのよ」と表明していると述べている。これは男児が幼児期ですでに人称代名詞を使うことによって自分の力と男らしさを表現することができること、女兒が「わたし」を用いてレディーであることを示したいという気持ちがあることが見て取れる。こうした自称詞に見られる性差は、自称詞に男性語・女性語を持つ日本語特有なものであり、自分を誇示する「おれ」の使用と、フォーマリティーを表現する「わたし」の使用を自我という側面から見た時、男児にとっての自称詞と女兒にとっての自称詞が不均衡であることがわかる。

以上の先行研究より、自称詞は自我と関わりを持つものであること、また日本語においてはどの自称詞を使用するかによって、話し相手に自分と相手の相対的位置を自分がどう

考えているかを伝えられるという特性を持っていることが示された。加えて、男性語・女性語があることは性差を考えていく上でも興味深いトピックである。次に、青年期の呼称についての研究がないので、調査対象を大学4年生（21～22歳）に変えて検証してみたい。

## 4章 青年による自称詞の使い方

### 〔調査目的〕

大学4年生40名（男女各20名ずつ）が日常で使用する一人称は、特定の状況下においてどのように変化するのか、その傾向をアンケートによって探る。

### 〔調査実施時期〕

2007年7月中旬から8月上旬にかけて本調査を行った。

### 〔被験者〕

札幌市内の大学に通う4年生（21歳～22歳）男子学生・女子学生を対象に調査用紙を配布し、各20名ずつ計40名から有効回答を得た。

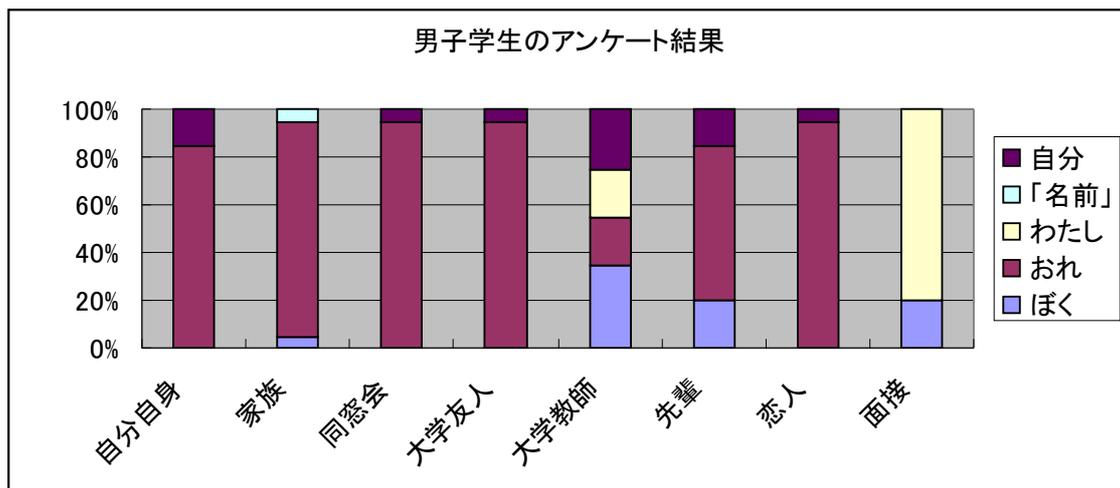
### 〔アンケート用紙の構成〕

1. 現在、主に使っている一人称は何か
2. 実家で家族といる時に使う一人称は何か
3. 出身高校の同窓会などで仲の良い友だちと話す時に使う一人称は何か
4. 大学で知り合った仲の良い友だちと話す時に使う一人称は何か
5. 大学の授業中、先生と話す時に使う一人称は何か
6. 部活やサークルなどで、先輩と話す時に使う一人称は何か
7. 恋人と二人きりである時に使う一人称は何か
8. 就職の面接などで使う一人称は何か

〔結果〕

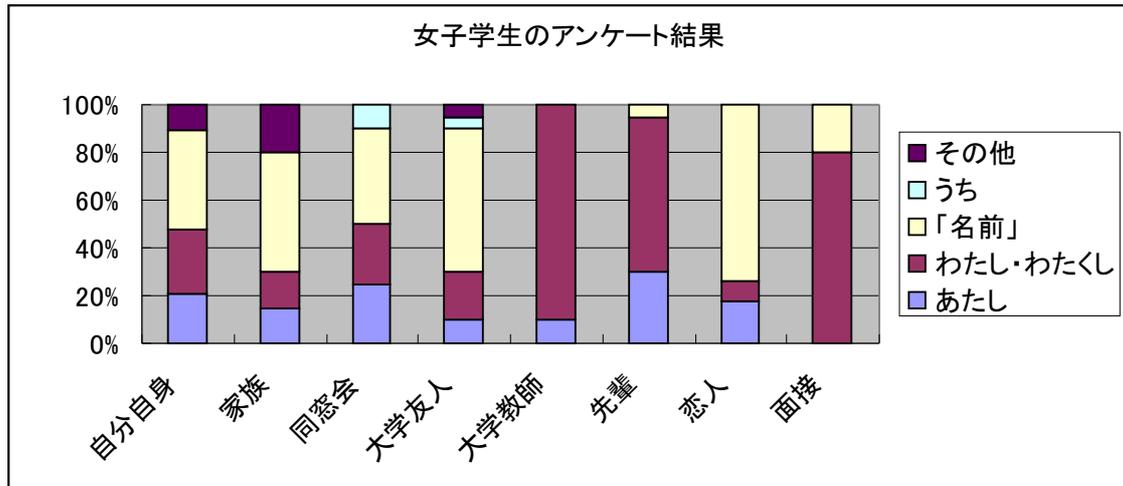
男子

	自分自身	家族	同窓会	大学友人	大学教師	先輩	恋人	面接
ぼく	0	1	0	0	7	4	0	4
おれ	17	18	19	19	4	13	19	0
わたし	0	0	0	0	4	0	0	16
「名前」	0	1	0	0	0	0	0	0
自分	3	0	1	1	5	3	1	0



女子

	自分自身	家族	同窓会	大学友人	大学教師	先輩	恋人	面接
あたし	4	3	5	2	2	6	4	0
わたし・わたくし	5	3	5	4	18	13	2	16
「名前」	8	10	8	12	0	1	17	4
うち	0	0	2	1	0	0	0	0
その他	2	4	0	1	0	0	0	0



大人である大学4年生が使用する自称詞について場面に応じた使い分けに着目し、札幌市内の大学においてアンケート調査を行った。その結果、第一に男子学生は大半が主に「おれ」を使用する。第二に、女子学生は家族や友人、恋人に対して「名前」を使用するが大学の教師やサークルの先輩に対しては「わたし」もしくは「あたし」を使用する。第三に、男子学生は家族や友人、恋人に対して「おれ」を使用する。大学の教師には通常使っている「おれ」を「ぼく」または「わたし」または「自分」に変え、サークルの先輩には「おれ」のまま変えずに用いる傾向が示された。第四に、男子も女子も就職の面接時では「わたし・わたくし」を使用する。TPOに合わせて日常使っている「名前」と「わたし・わたくし」を使い分けられていることが示された。言い換えれば、「わたし・わたくし」を場面に応じて使うことができるにもかかわらず、日常的にあえて「名前」に変更しているということであろう。

小林（1999）によると、談話資料の分析を行い、「改まった場面で使われる」という従来の基準を認めつつ、一方では女性の自称詞「わたし」と「あたし」に関連して次のような指摘がなされている。

「…その使い分けはきわめて緩やかで、基準にはまらない例も多数見られると言える。特に20代では年上の相手にも「わたし」と同様に「あたし」を用いるなど、自称代名詞が基準にとらわれない自由な意識で用いられることによって、その待遇的な意味が希薄になっていることも伺え、「絶対的な個を表す」自称代名詞へと一步踏み出しているとも言えそうだ」

このような言及は、金丸（1993）や野元（1987）などでは見られなかった指摘で非常に興味深い。野元は「子どもの場合は相手が誰であろうと『ぼく』を使うことも許されますが、ある程度の年齢になったら同輩以下に対して自分を示すときはいいのですが、その他は不適當です。つまり、これは同輩以下に使うのが原則ですから、これを使うと尊大ととられるおそれがあります」と述べている。一方、小林は「『おれ』を使う人は特に改まった場では自称を変えることを考えなくてはならないかもしれない。しかし『ぼく』を使用している人はそのような場で文体を丁寧にする場合に自称は変更する必要は少ない。なお2つの自称代名詞を使い分けているうちの一人は『わたし』と『おれ』、二人は『ぼく』と『おれ』を使っており、これも『ぼく』がくれた『おれ』よりはむしろ『わたし』に近い待遇的位置にあることを示している」と述べている。

## 終章

西川が、保育園児に行った調査によると「『わたし』は小学校に行ったら使う」とあるように、幼児にとって「名前・愛称」を「わたし」に変えることは、「大人に近づくこと」であるのだろう。しかし、大学4年生にとったアンケートからわかるように年齢的にも十分「大人になった」はずの21歳～22歳の女子が自称詞として自分の「名前」を多用していることは、一種の退化現象と捉えることができるのではないだろうか。モラトリアムの時代に生きる女子大生は、「大人になりたくない」という心理から、「わたし」というフォーマルな言い方より自分の「名前」を使用することによって「まだ大人ではないのよ」と言いたいのかもかもしれない。一方、男子大生は自称詞として「名前」を使用することは無く、「おれ」が一番多かった。またフォーマルな場面において、通常使っている「おれ」という自称詞を「わたし」に変えることで対応していることがわかった。男子大生も、女子大生と同じくモラトリアムである可能性を否定することはできないが、自称詞の変化からは知ることができなかった。

大学生を対象とした藤原・黒川の調査から、「甘え」は両親よりも恋人・親友の方が多く見られると出ており、アンケートからも「名前」を使うと答えた女子は、家族といる時より大学の友人・恋人といる時の方に人数が多い傾向が見られた。また外山・高木の研究から青年期の男女において、男子は「甘え」を否定的に捉え、女子は肯定的に捉えている

ことが示唆された。このように「甘え」の欲求は女子の方が強いという結果を得ていることから女子の方が男子より自称詞として「名前」を使用する頻度が高いのかもしれない。また、「どんな時に『名前』を使うのか」という質問をしたところ、一番多かった回答が「恋人と一緒にいて、甘えたい時」であった。やはりキーワードは「甘え」である。

このことから「呼称」と「甘え」には関連性があることがわかり、女子の方が男子より、「甘え」意識が高いと言えるかもしれない。

しかし、いつまでも自称詞として「名前」を使用するのは、大人の女性としてあまり感心できないということも示唆された。アンケート調査をした男子を対象に「会話中に自分のことを『名前』でいう大学4年生の女子をどう思うか」という質問をしたところ、「幼い印象であり良くない」「10代ならまだしも20代には無理がある」「成人女性としての自覚が足りないように思う」などという否定的な意見がほとんどであった。以上のことから、男性からもよく思われない日常的な自称詞としての「名前」の使用を「わたし」に変えていくことが、成人女性としての「大人の品格」であると考えられる。

## 引用文献

- (1) 土居健郎 (1971) 『「甘え」の構造』, 弘文堂
- (2) 土居健郎 (2001) 『続「甘え」の構造』, 弘文堂
- (3) 藤原武弘・黒川正流 (1981) 「対人関係における『甘え』についての実証的研究」  
実験社会心理学研究, 21, 53 - 62
- (4) 高松雄太・加藤和生 (2001) 「『甘え』、『甘える』、『甘えさせる』とは何か? - 素朴概念の分析を通して -」 九州大学心理学研究, vol.2, 159 - 167
- (5) 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』, 講談社現代新書
- (6) れいのるず=秋葉かつえ (1997) 「言語と性差の研究—現在と未来—」, 井手祥子 (編) 『女性語の世界』, 199 - 216, 明治書院
- (7) 祖父江孝男 (1972) 「日本人の意識と国民性の変遷過程」, 鮎戸弘・富永健一・祖父江孝男 (編), 『変動期の日本社会』, 日本放送出版協会
- (8) 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』, 岩波新書

- ( 9 ) 大庭健 (2003) 『私はどうして私なのか』, 講談社現代新書, 64 - 70
- (10) Wallon (1983) 『身体・自我・社会』, ミネルヴァ書房
- (11) 竹友安彦 (1988) 「メタ言語としての『甘え』」, 『思想』, 768, 123 - 155
- (12) 荻野恒一 (1968) 「甘え理論をめぐって」, 14 卷3号
- (13) 小此木啓吾 (1968) 「甘え理論(土居)の主体的背景と理論構成上の問題点」, 精神分析研究, 14(3), 14 - 19
- (14) 小此木啓吾 (1980) 「現代青年とモラトリアム人間」, 『臨床社会心理学と一統合と拡散』, 至文堂
- (15) 外山嘉奈子・高木秀明 (1991) 「青年期の『甘え』の心理に関する研究」, 横浜国立大学教育紀要, 31, 99 - 103
- (16) 外山嘉奈子 (1993) 「パーソナリティとしての『甘え』」, 『児童心理 12 月号 特集・甘える子』, 金子書房, 16 - 22
- (17) 労働経済白書 (2005) 厚生労働省
- (18) Erikson (1959) 『Identity and The Life Cycle, International University Press』 『自我同一性』小此木啓吾訳編, 誠信書房
- (19) 山添正 (1983) 『モラトリアム世代の自立』, 有斐閣
- (20) 木村敏 (1972) 『人と人との間—精神病理学的日本人論—』, 弘文堂
- (21) 西川由紀子 (2003) 「子どもの自称詞の使い分け: 『オレ』という自称詞に着目して」, 発達心理学研究, 第14巻, 第1号, 25 - 38
- (22) 西川由紀子 (2002) 「5歳児女兒は自称詞をどのように使っているか?—『うち』使用ブームに着目して—」, 華頂短期大学紀要, 47, 88 - 101
- (23) 井手祥子 (1979) 『女のことば 男のことば』, 日本経済通信社
- (24) 田中昌人・田中杉江 (1984) 『子どもの発達と診断3 幼児期I』, 大月書店
- (25) 小林美恵子 (1999) 「自称・対称は中性化するか」, 『女性のことば・職場編』, 現代日本語研究会(編), 113 - 137, ひつじ書房
- (26) 金丸英美 (1993) 「人称代名詞・呼称」, 『日本語学』, 12 - 5, 109 - 117, 明治書院
- (27) 野元菊雄 (1987) 『敬語を使いこなす』, 講談社